



# 協会ニュース

## 第37号

平成28年 3月 1日発行

〒151-0072 東京都渋谷区幡ヶ谷1丁目1番12号 (日本基礎技術株式会社内) TEL. (03) 3373-5877  
 homepage: <http://rocktech.jp/> E-mail: [rocktech@muse.ocn.ne.jp](mailto:rocktech@muse.ocn.ne.jp)

## i-Construction

岩盤削孔技術協会

会長 見波 潔



昨年、建築の分野での杭の施工に関してデータの改ざんという事件が起きました。土木の基礎工や軟弱地盤改良工といった地盤を対象とする工種にわずかながらも関わっている者として残念でなりません。建設業界に対する国民の皆さんの信頼を損なうようなことは断じて許されません。

土や岩を扱う技術者は、地表しか見えない地盤に対して、いかにしてその性状を知り、主目的である構造物の基礎をどのように設計し、いかにして施工するかということに努力してきました。調査の分野では、限られた数のボーリング調査を補完するための弾性波探査などを活用し、施工の分野では、杭の打ち止め管理手法をはじめ施工時の各種データを活用した施工管理手法を開発するなど、「見えない所」での施工の「見える化」を進めてきました。

技術者の経験や勘が重要な分野ではありますが、これに客観的なデータを加えることで信頼性を向上させてきたものと思います。その基本となるのは、技術者としてデータを大事にするということではないでしょうか。

さて、国土交通省では昨年12月に「i-Construction委員会」を立ち上げました。測量・設計から施工・検査、維持管理・更新までの全プロセスにICT(情報通信技術)を導入し、建設現場における生産性を向上させようとする取組です。

この取組および関連技術の開発・普及が進むと、現場の各種データが飛躍的な勢いで流通することが想定されます。また、3次元モデルなどにより一層の「見える化」が進むでしょう。建設現場がこれまで以上に「ガラス張り」になると言っても過言ではありません。

このような流れの中で、建設に携わる技術者は「データ」というものに真摯に向き合う必要があります。倫理的な問題は論じるまでもありませんが、我々技術者は客観

的かつ事実に基づいた情報に基づいて様々な判断をしなければなりません。また、データとこれに基づく判断は工事の次のプロセスに引き継がれていくことを肝に銘じる必要があります。

一方で、ICTの導入によってデータはどんどん流通すると、肝心の人間が確認・判断しなければならないところがブラックボックス化してしまわないか、という危惧もあります。建設の分野で人間と技術の融合の永遠の課題ですが、ICTや機械の力を活用して「いいもの」を安全に作る工夫を続けることが必要であることは間違いありません。

岩盤削孔技術協会は、様々な構造物の基礎を作ったり地下利用のための空間を構築する際に必要となる大口径岩盤削孔工法の普及および技術の向上を図ることを目的として活動しております。高い技術力を有する施工専門業者ならびに機械製作会社を会員として平成元年に設立し、四半世紀が過ぎたところですが、いわゆる「縁の下の力持ち」のような存在として社会に貢献してきたものと自負しております。今後は、岩盤削孔技術もi-Constructionの一端を担う責任があるとの認識で、関連業種と連携して建設生産性の向上に寄与していきたいと考えています。

協会では、大口径岩盤削孔工法についての発注者、設計者、施工者の皆様からの様々な技術的問い合わせや要請に対応すべく、技術相談をお受けしています。また、最新の技術動向などを広くお伝えするために、ホームページや協会ニュースを通じて外部への情報発信や会員相互の情報交換を行っています。さらに、(一社)日本建設機械施工協会主催の「橋梁架設・大口径岩盤削孔の施工技術と積算及び建設機械等損料」講習会に講師を派遣し、大口径岩盤削孔の施工技術と積算についてご理解いただくよう努めております。

また、各種の図書発行を行っており、平成28年度は「リーダ式ケーシング回転掘削工法積算資料」、「会員施工会社施工実績調査表(平成27年4月～平成28年3月)」の発行を計画しております。

技術を大切にする会員の皆様とともに大口径岩盤削孔技術を育て、発展させて参りたいと考えておりますので、一層のご支援をお願い申し上げます。